

■修徳学区の歴史

誇るべき二つの「伝統の柱」

修徳学区という地域には、歴史的な政治と文化面での伝統と、町と町組の自治の伝統の、誇るべき二つの「伝統の柱」があります。

[1] 政治的文化的史跡と歴史的人脈

(1) 鎌倉初期の公家政治の改革者、関白九条兼実の人脈

修徳学区の東部には関白九条兼実の和歌の師であった藤原俊成の邸宅跡が、五条大路（現在の松原通）の烏丸小路から室町小路にかけてあり、南は樋口小路（現在の万寿寺通）にまで及んでいたといわれています。そのため俊成は五条三位と称されました。烏丸通松原下の俊成社は俊成の霊を祀っています。また、「俊成邸内に和歌山の玉津島神社の歌道の神、衣通郎姫を勧請せよ」と後鳥羽天皇の宣旨が下ります。それが松原通烏丸西入りの新玉津島神社です。そして、第7番目の勅撰集「千載和歌集」を撰進するよう後白河法皇の院宣が下り、俊成は自分の邸宅内（新玉津島神社から南へ室町までの部分）に「和歌所」を設置しました。それ以来、この「和歌所」の別当が、新玉津島神社の別当（神職）を兼任する慣習ができました。

そして、学区の西部には兼実の信仰の師であった法然の弟子で、兼実の弟の天台座主慈円の弟子でもあった親鸞が晩年を過ごし入滅した、兼実の花園別邸跡があります。現在の位置は、親鸞入滅の石碑がある松原通西洞院東入りの光圓寺から月見の池のあった万寿寺通東入りの大泉寺までの一帯であります。兼実の人脈でつながる修徳学区の東と西のこの地域は、鎌倉初期の政治文化の中心地だと確認することができます。

(2) 平安後期白川院政時代の大江匡房の千種殿と江家文庫

院政を支えた律令官僚の受領（現地着任する国司、現在の知事クラス）で文章家であった大江匡房は、美作守に任ぜられたとき、他の受領たちと同じく富をたくわえ、五条大路から六条坊門小路（現在の五条通）、西洞院大路から室町小路の広大な土地にあった具平親王の邸宅を手に入れ、その東北部分に江家文庫をつくり、万卷の書籍を蒐集しました。この邸宅は千種殿といわれ、この一帯を千草町といっておりました。ここも平安時代院政初期にも、政治と文化の中心地と確認することができます。

このような受領の蓄財に関わる史跡には、「江州五倉」といわれた近江守藤原隆時の倉庫群のひとつが五条大路東洞院大路（現在の東洞院松原）付近にありました。こういった受領たちの邸宅が五条大路に立ち並んだといえます。また、この受領層は、その子弟から紫式部や清少納言などを輩出し、当時の政治と文化の担い手でした。

(3) 祇園会由来の町と京都の城下町化による領主の京屋敷の存在

修徳学区には、室町時代以降に、祇園社の牛頭天王の八王子とその神社の創建に関わる石に由来する烏丸万寿寺付近の町など鉾町に由来する伝承のある町や鉾町の寄町があります。また、江戸時代には京都の城下町化で亀山藩や伊予藩の京屋敷があった伝承が一、二の町にみられます。

今後とも、通りや町の由来を調査研究して、学区の史跡や町の由緒を学区民の誇れる資産としていきたいものです。

[2] 町と町組の自治の伝統

(1) 戦国時代、織田信長に公認された自治組織

室町時代末期には、自衛のために存在した町と、その連合体である町組、さらに、下京に5つある町組のまとまりである惣町がありました。信長は、その町に警察権行刑権を公認し、町で処理できないときは、町組の惣町で補完せよとっています。戦国時代までは、町と町組の組織は五条大路（現在の松原通）までしかありませんでした。修徳学区の各町は、豊臣秀吉が西本願寺を寄進し、その寺内町が発展していく過程で町ができていき、巽組、川西9町組、川西16町組にわかれて所属していきます。通日も秀吉が六条坊門小路を「五条通」としたため、もとの五条大路は新玉津島神社の松林にちなんで、「松原通」となりました。江戸時代にも、この自治の伝統は継承されたのです。

(2) 明治維新の町組の一円化と修徳小学校の学区経営

明治維新になると、欧米列強に肩を並べる近代文明国になるには、教育がその基礎になければならないと、自治の伝統をもつ町と町組を活用し、町組を番組と名称を変え、さらに、一番組一小学校とし、小学校を中心に一円化しました。修徳学区は、当時第14番組といわれ、徳万町の北条太平衛さんがその敷地を寄付し、日本で最初に、第14番組小学校を建設し授業を始めました。後の総理大臣伊藤博文が来訪して、明治維新の改革と復古の精神を表した中国の『詩経』大雅篇文王章第6章の「脩厥徳」（その徳を修めよ）を扁額に書き、修徳小学校と命名してくれました。修徳小学校は、日本で最初に小学校会社を設立し、学区が小学校を経営していきました。この学区経営は、昭和17年、当時、国民学校と称していた小学校が、市立となり京都市に経営が移るまでつづきました。修徳学区民の誇りがここにもあり、小学校を核とする強い心の絆が育まれる基盤になりました。

(3) 洛央小学校への統合から「まちづくり」へ

戦後、民主主義教育になり、昭和22年に市立修徳小学校となってからも、昭和49年の修徳小学校のプール建設にみられるように、小学校への学区民の資金援助はつづきました。そして、昭和63年末に転機がまいります。洛央小学校への統合が決定し、修徳小学校の跡地を学区民の心の絆の核にふさわしい施設にするだけでなく、跡地問題を「平成の事業=修徳学区のまちづくり」に昇華させるため、まちづくりテーマ「社会教育プラザ 花と緑 健康と福祉の学区（まち）修徳」を掲げます。跡地を福祉施設とし、運動場跡に学区民みんなでデザインした修徳公園をつくって学区民の強い絆の核とし、学区の景観の中心に位置づけました。修徳学区の「まちづくり」の特徴は、勉強会、アンケート、ワークショップなど学区民の想いを確かめながら、それを文書に策定していき、共通認識を豊富にしていくことです。平成13年3月には、学区民の想いを集大成した『修徳学区の地区計画』を、京都市都市計画審議会が承認しました。そして、さらに『修徳学区の地区整備計画』を策定する前に、修徳学区の文化的史跡にふさわしい町並みや安心安全できれいな「まち」づくりの共通認識を学区外の関係者にも理解してもらうため、『地区計画』を更に詳細にし具体化した『修徳学区まちづくり憲章』を、このたび、策定いたしました。この『憲章』を基礎に、この学区（まち）を町衆の心意気で、住みつけたい、顔の見える、きれいな「まち」にしていきたいと思います。